報告番号　甲　第　　号

川上一君　博士学位請求論文　審査報告

論文題目　室町殿歌壇の研究

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学教授（文学部）文学研究科委員　　小川　剛生

副査　慶應義塾大学准教授（文学部）　　恋田　知子

副査　東京大学大学院教授（人文社会系研究科）　　高橋　典幸

本学位請求論文は、室町幕府将軍の和歌活動と、将軍が庇護した京都歌壇の実相、関係する歌書につき考察したものである。武家政治家が和歌を愛好したことは文学史上でも重要な事柄であるが、現存する資料は断片的であり、専論も極めて乏しい。本論文では、八代将軍足利義政（1436-1490）を中心として、中世社会において権力者の作歌活動がいかなる意義を有し、影響を及ぼしたのかを考察し、和歌史観の刷新を促すものである。

目次は以下の通りで、既発表論文八本に新稿を加え、全体で三部十章と附録からなる。

凡例・序章
第一部　足利義政の時代
　第一章　歌人足利義政伝
　第二章　『慈照院自歌合』について
　第三章　義政の家集および連歌資料について
　第四章　足利義政の詠風
第二部　正徹と招月庵歌壇
　第一章　天理図書館蔵『招月庵詠歌・四十二番歌合』の基礎的考察
　第二章　招月庵歌壇について
　　―四十二番歌合から―
第三部　武家歌壇とその周辺
　第一章　文明十四年将軍家千首について
　第二章　室町時代公武月次歌会について

第三章　禁裏着到和歌の成立
第四章　歌書本文の形成と内題における「続歌」の機能
—文明十三年着到千首から—
終章
附録　足利義政全歌集

論文要旨

中世は和歌の権威が確立して久しく、公・武・寺社などの権門、または都・鄙と、政治権力と和歌とがそれぞれに緊密な結びつきを見せる時代である。権力者が歌会や歌合を営む時には、必ず専門歌人（歌道師範家出身の廷臣）を起用し指導に当たらせ、自身も作者として臨む。こうして作歌のためのコミュニティ、すなわち歌壇が形成される。歌壇を単位とする歌人社会の構成員の動向、とくに庇護者である権力者、指導者である歌道師範家に注目し、和歌の社会的意義や機能の解明を目指す史的研究が歌壇史研究である。

足利将軍家は、伝統的な公家文化に親しんだが、とりわけ和歌については傾倒著しく、南北朝期以後は勅撰和歌集の編纂を事実上発起するなど、つよい指導力を示した。三代将軍義満以降、将軍家の家督が、公武政権の首長となり、「室町殿」と称されるようになると、将軍の公家化はさらに進行し、その歌壇は京都歌壇の中枢を占めるようになる。川上君は、まず、こうした室町殿歌壇の動静に着目し、その実態を解明するとともに、周辺の歌壇との関係性を明らかにしていく。

第一部「足利義政の時代」は、従来の歌壇史研究において、重要度に比較して考察が不足していた、八代将軍足利義政の和歌事績を、伝記・資料・歌風の三側面から取り上げ、歌人としての軌跡を辿る。

第一章「歌人足利義政伝」では、文安四年（1447）の「和歌始」より延徳二年（1490）に没するまで、およそ半世紀にわたる義政の作歌事績を、政治動向と対照しながら考証する。義政の生涯における転機は、やはり応仁・文明の乱であるが、歌人としての活動もこれを境に大きく変容する。それまでは過去の室町殿の先例を踏襲するばかりであった義政の作歌空間は、大乱の勃発とともに瓦解し、かわりに天皇・上皇を交えた不定期の和歌興行が盛んに催されるようになる。その環境下で義政は、歌会の点者・出題者をつとめるのはもとより、武家被官への作法指導や、家司の詠作の添削を行う等、従来の室町殿の地位を超え、歌壇の指導的地位を担うまでになる。室町殿の権力は乱後に急速に喪失したとされるが、義政が限られた範囲ながらも、なお求心力を維持していたことは、こうした積極的な文芸活動に看て取れると指摘する。

第二章「『慈照院自歌合』について」では、義政が晩年に自撰した『慈照院自歌合』の基礎的問題を考察する。まず現存諸本を整理し、最善本として未紹介伝本である宮内庁書陵部蔵桂宮本（『歌合』所収）を指摘する。ついで自歌合収録歌と、その出典との照合を行い、一部伝本の識語が「文明十五年正月」とする成立年時は信用できるものと結論する。その上

で、文明十五年（1483）が義政の「室町殿」引退の年であることを指摘し、「過去の自詠を集める」という自歌合の制作には、これを記念する義政の意図を汲み取ってよい、とする。

第三章「義政の家集および連歌資料について」では、義政の家集と連歌資料を対象に、読解研究に適した作品テキストの検討を行う。家集は、⑴慈照院殿義政公御集（部類家集）と⑵源義政集（定数歌集成）の二種を取り上げ、その基礎的問題を考察する。⑴慈照院殿義政公御集は、「私家集大成」にも収録される、最も著名な義政の家集だが、他人の詠の混入が早くに指摘されている。そこで改めて全体を検証し、この家集の編纂そのものがかなり後世に降り、かつ作為の手が加えられていることを指摘し、少なくとも義政の作品の読解には適さないと結論する。いっぽう、⑵源義政集は、六種の定数歌の集成であり、こちらは義政真作として確実なものである。但し、共通祖本の段階で脱落歌を有しており、本文異同も複雑であるため、現行の翻刻テキストでは読解に課題が残る。そこで、これと同内容の伝本、肥前島原松平文庫本を新たに紹介し、今後の研究の基礎とすべき善本であることを指摘する。なお該本には外題に「飛鳥井栄雅歌書写」という注記が存するが、これと同様の注記を持つ写本が連歌資料にも存在している。これらは従来、義政の歌道師範であった飛鳥井雅親（法名栄雅）の著作と看做されていたが、内容の再検討を行い、実は全て義政の著作であったことを明らかにした。たとえば松平文庫本『愚句』は長く雅親の連歌句集とされていたが、義政の句集であった。

第四章「足利義政の詠風」では、ここまでの検討を基礎に、義政詠の通時的な読解分析を試みる。義政の生涯をその居所や社会情勢によって、前期・中期・後期に区分し、各期の詠風を調査する。義政の詠風は、中世和歌の主流である「題詠」に基づいた尚古的な風味を有しており、全体として同時代歌人との差異はない。しかし中期以降には、題詠の中に自らの真情を投影する詠、あるいは応仁・文明の乱に際しての心情を詠み込む作品も現れ、環境に応じた題材の工夫が認められる。こうした例には「義政詠」と呼ぶにふさわしい、個性の表出が認められると結論する。

第二部「正徹と招月庵歌壇」は、義政と同時代に活動した歌僧清巌正徹（1381-1459）が形成した招月庵歌壇の実態を、学界未紹介資料である天理図書館蔵『招月庵詠歌・四十二番歌合』の分析を通して明らかにする。

第一章「天理図書館蔵『招月庵詠歌・四十二番歌合』の基礎的考察」では、この新出資料を紹介して解題を示し、ついで『招月庵詠歌』の内容を分析する。『招月庵詠歌』は正徹の新出家集であり、307 首を収録する。草根集をはじめとした他家集との照合を行うに、104 首が新出詠と認められる。重出歌に関しても、既存の家集本文との直接的な関係性は認められず、未知の歌会歌稿をもとに招月庵の関係者によって編纂されたと結論する。

第二章「招月庵歌壇について―四十二番歌合から―」では、『四十二番歌合』に焦点をあて、その意義を多角的に検討する。『四十二番歌合』は、康正二年（1456）六月二十三日に恩徳院で開催された正徹判の歌合である。恩徳院は正徹幼少時より縁の深い寺院であるが、草根集に見える同院の歌会興行を分析するに、これが正徹を中心とした歌壇、「招月庵歌壇」

の行事であることが判明する。つまり、恩徳院歌合とは招月庵の歌合であり、『四十二番歌合』が同歌壇の実態を留めた現状唯一の写本であることを指摘する。ついで出詠歌から招月庵歌壇の詠風に分析を加える。『四十二番歌合』の正徹詠は、歌題を詠み込む段階から、伝統的な枠組みを逸脱しており、自由な発想が認められる。いっぽう門人たちの詠は、表現上の創意工夫はあるものの、題詠という面においては伝統の範疇にあり、師に追従する作品はみられない。こうした作風の不継承は、正徹没後、招月庵歌壇が急速に衰退していった事実の遠因となっている可能性を示す。

第三部「武家歌壇とその周辺」は、義政の父義教、息義尚の代を含めた武家歌壇、およびこれに隣接し、しばしば武家歌壇に包摂された禁裏歌壇の活動について、歌会・定数歌の運営という和歌史上の大きな問題を取り上げて論じている。

第一章「文明十四年将軍家千首について」では、足利義尚が文明十四年八月十一日に主催した千首歌会を取り上げ、彼の初期歌壇の形成過程を考証する。義尚の作歌活動が活発化するのは、この年以降であり、そこには父義政の長谷隠棲、歌道師範の飛鳥井雅康の出家が影響しているとする。同年に開催した千首歌会という大規模な催しは、義尚が自身の政務開始を、和歌を以て象徴するため企画したデモンストレーションであるとする。

第二章「室町時代公武月次歌会について」では、室町期に禁裏と室町殿で催行された月例の歌会、「月次歌会」に着目し、それぞれの開催状況を概観しながら、相互の関係性および、この間におこった応仁・文明の乱の影響を検証する。公武歌壇は後花園天皇と義政の時代に「禁裏外様月次歌会」を介して結びつくが、こうした公武の協調体制は大乱の勃発とともに瓦解し、以後両歌壇が個別に運営される時代が訪れる。公武歌壇の従来の体制を崩壊させたという点で、応仁・文明の乱は確かに和歌史上の画期と評価できる。但し、室町時代の歌壇運営を月次歌会から眺めたとき、例外というべきは、むしろ後花園・義政による協調体制の時代であり、応仁・文明の乱はそれを本来の体制に戻したにすぎない。より重大な画期と評価すべきは、公武歌壇にこうした協調を促す原因となった、嘉吉三年（1443）の禁闕の変であろうと結論する。

第三章「禁裏着到和歌の成立」では、後土御門天皇の禁裏歌壇において、新たに恒例行事となった「着到和歌」の成立過程を考察する。着到和歌は、複数人が指定の場所に出向き、毎日一首、百日百首を詠む形式をさすが、これは鎌倉期よりみえる、諸芸を百日連続で行う「百日興行」に由来することを指摘する。さらに禁裏における「百日和歌」を「着到」と称するのは、室町期に制度化した「禁裏小番」の着到（出勤簿）が由来であると述べる。当初の着到和歌は、天皇（上皇）が独自に行っていた百日和歌に、小番衆が当直の日のみ参加する形式であり、これを禁裏小番と切り離し、参加者全員が百日百首を詠む興行としたのが後土御門天皇であるとする。なお、その意図は廷臣の祇候頻度を上昇させ、応仁・文明の乱以後の世上不安を解消する手段であったとの新見解を示す。

第四章「歌書本文の形成と内題における「続歌」の機能―文明十三年着到千首から―」では、文明十三年九月一日起日とする禁裏着到千首（＝文明千首）を取り上げ、本文の形成過

程の復原を試みる。文明千首は、短冊で詠進されたのち、合点に供されるため寄せ書きされ、さらに転写を経て後代に伝わったものである。まず、新たに見出された伝本、宮内庁書陵部蔵鷹司本を紹介し、これが当時実際に合点に供された清書本原本であることを指摘、清書本と後世の転写本の本文を比較し、転写本系が清書本に先んじて作成された「中書本」を共通祖本とすることを明らかにする。ついで、清書本にのみ見える「続千首和歌」という内題に注目し、意味するところを検討する。「続」の字は、この着到和歌が「続歌」であることの表示であり、これは室町期のみならず中世の「続歌」が、従来重視されていた「当座性」ではなく、「複数の歌題を複数人で分担して定数歌を完成させる」という性格をもって認知されていたと指摘する。そして現存する続歌の寄せ書き原本の多くが、合点に供するためもともと無記名であったことから、内題の「続」の字は本来、興行の性格・規模を、点者など外部の人間に知らせることを意図した表示であった可能性を提示する。

審査報告

川上君は、卒業論文より一貫して、室町時代和歌の研究に取り組み、その成果を精力的に学術雑誌に発表、高い評価を得ている。とくに『中世文学』65 号に掲載された論文「正徹晩年の「招月庵歌壇」の実態―天理大学附属天理図書館蔵『招月庵詠歌・四十二番歌合』をめぐって―」（本論文第二部第二章）は学会口頭発表時から注目を集め、論文は 35 歳以下の若手研究者に与えられる第 3 回中世文学会賞を受賞している。

川上君が第一部で対象とし、かつこの論文の骨格となるのは足利義政の活動である。義政は室町幕府八代将軍であるが、その称としては、タイトルにある「室町殿」が最もふさわしい。これは三代将軍の義満が営んだ御所の名称に因むが、そこに居住していなくとも、足利将軍家の家督、つまり将軍ないし実権を握る前将軍を指す。当時も使われた語であるが、現在は室町時代の最高権力者を指す用語として、日本史・日本文学・美術史などで共有されるようになった。「室町殿」は、三代義満に始まり、義持・義教・義政へと継承され、その間、武家社会のみならず、院政期の上皇と同じく内裏の天皇を後見して公家社会をも支配し、また伝奏を通じて顕密寺院にも君臨したのであった。義政はこうした支配の実質を伴った最後の「室町殿」であった。

かつては室町幕府と言えば、政治的な混乱・衰退といった面が強調され、将軍権力の内実については等閑視されていたものの、近年は資料の発掘が進み、それに基づく実証的な研究によって、将軍権力の形成が正しく評価されるようになっている。

重要なことは、この時代の文学・美術・演劇などの顕著な深化には、室町殿の審美眼、そしてイニシアティヴがあったとされることである。これはかねてより注目されていたが、従来は革新性・庶民性への傾斜を強調していた。これに対し、川上君の研究では、伝統的な雅文芸である和歌にこそ、室町殿の主体的な関与があったことを論じている。そして公武一体となって活動した室町殿歌壇の分析を通じて、室町殿の政治と文化にまたがる指導力を十二分に明らかにしたことは、近年、隆盛を極めている室町時代研究のうちでも、特筆すべき

業績であると言えよう。

第一部は足利義政についての論攷からなる。第一章では、義政の歌人としての生涯を素描し、第三章では、家集や各種定数歌など分散して伝来してきた義政の和歌・連歌資料を初めて整理し、疑わしい作品が排除されている。逆に飛鳥井雅親の句集として疑われることのなかった『愚句』が実は義政の句集であったとの新見もあり、連歌句集そのものが僅少な中世に、将軍自らが句集を自撰していた事実には驚かされる。附録の「足利義政全歌集」は 1500 首余りの和歌を集成し、編年順に排列したもので、歌人義政の全体像に接することができるようになった。これを受けて、第四章では生涯を三期に分けて歌風を詳しく論じている。義政は生涯にわたり詠歌し、1500 首余りという、室町将軍のうち最も大量の作品を残している。このため、こうした分析が可能となった訳であるが、これはひとりの室町歌人が、いかにして修辞の技法を習得し、さまざま工夫を凝らしながら成長し、個性を獲得するに至るかを示す内容にもなっている。その義政が、晩年に生涯の秀作をみずからまとめた『慈照院自歌合』については、第二章で論じられていて、諸本・本文・成立といった基礎的問題をほぼ解決している。さらには、室町・戦国期には自歌合の編纂が流行した現象、ことに武家歌人においてその傾向が見られることに着目して分析しており、義政がその先鞭を付けたことを明らかにしたのは、いまだ進展していない中世歌合の研究にも寄与するものである。

続いて第二部は、義政に信任され、当時の歌壇で存在感を示した歌僧正徹についての論攷である。新資料である『四十二番歌合』を紹介することで、これまで全く知られていなかった、正徹の主催する和歌サークル、招月庵歌壇の実態を浮き彫りにした。在京する守護大名の被官たち、武家歌人のかなりの人材が、この歌壇に列なって、正徹の和歌指導を受けていたことが判明した。正徹は、難解で前衛的な歌風で知られる、室町和歌の孤峰というべき存在であるが、彼を慕う人々のサークルが形成されていたこと、しかし身近な歌人でも師の歌風の継承は難しかったことなどが明らかになっており、歌壇と歌風との関係について考えることもできる、示唆に富んだ内容である。

第三部は、四章にわたり、義政・義尚を中心とした、室町殿歌壇の和歌行事を考察している。応仁・文明の乱後、室町殿は公武歌壇を包摂する形で、月次歌会のほか、千首続歌、褒貶歌合、着到和歌といった方式による、大がかりな催しをつぎつぎと挙行した。

これらは当時よく見られた詠歌方式であるが、その後は伝統が途絶え、これまでの説明は曖昧なところがあった。川上君は、当時の資料に即して、その手続きを解明し、思い込みや誤解を取り除いた。そして歌会作品が参加者の手で集成され、鑑賞や批評のために改編された後、後世の人の眼に触れて二次的な利用に供されるまでをたんねんに追跡している。これによって、この時代の和歌が詠まれる場が忠実に再現されるのみならず、作品が識者によって添削され、後世に新たな読者を得る過程が初めて具体的に明らかになった。しかも、これは当時の資料がほとんど活字化されていないばかりか、所在さえ明らかではない現状で進められたもので、副産物的ではあるが、これまで未紹介のまま放置されてきた多くの歌書の資料的価値にも光を当てる結果になっている。

義政・義尚父子は、自ら歌会の出題をしたり、廷臣の詠草を添削したり、貴重な歌書を指定して書写させたり、遂には私撰集を編纂したりと、それまでの和歌を好んだ権力者とは、質的に異なる活動を展開していたことになる。従来であれば、政権の座から滑り落ち、閑暇をもてあました結果であると消極的に評価されたはずであるが、この論文の特色は、そのような結論には安易に至らないところにある。室町殿には、応仁・文明の乱後も依然として、階層、教養を異にする人たちが会して、大量の和歌を詠み続けていた。そして、近年の室町幕府研究は、後世の通説とは異なり、義政が最後まで最高権力者として振る舞い続けていたことを繰り返し述べている。歌壇における義政の指導力はまさにこれを証明するものである。室町殿歌壇が、嗜好や方向性を同じくする、結束力の強いコミュニティとして存続し得た仕組みが明らかになったことは、限定的ではあるにしても、将軍の権力構造そのものを再考させることになっている。この点で、川上君の研究が、文学のみならず、史学の研究にも与える影響は多大であろうと思われる。

一方で、この論文には、課題や問題点がないわけではない。

まず、第一部においては、義政の連歌事績についても具体的な言及が欲しい。連歌が和歌と並んでこの時代の主要文芸となっていたのは周知の事実であり、義政もこれを愛好し、没後成立の新撰菟玖波集にも多くの句が入集している。従来は資料上の制約もあり、十分な分析が困難であったが、この点は、まさに第三章での基礎的検討が解決したところでもある。川上君自身、第四章の歌風研究において、義政詠に連歌の発想を借りた表現があることを指摘していることも重要で、そこから進んで、義政の連歌作者としての検討、歌人像との相対化は、是非取り組むべき課題と言える。

ついで、第二部の正徹を論じた章がやや孤立的である。義政が正徹の指導を受けている事実もあることから、義政への影響という視点で、なお関連して論じられることがあったと思われる。また義政の正式な師範は飛鳥井雅親であり、没年も義政と同年である。生涯にわたり指導を受け続け、活動の場を同じくし、時には一体というべき存在であったことは随所で指摘されていた。雅親および弟雅康の考察も必要であろう。

室町殿歌壇には、公家・武家のみならず、地下や五山禅僧の参入も見られる。こうした、和歌的世界とは縁遠かった人たちをどのように包摂したのか、あるいはどうやって彼らが接近していったのか。当時の禅僧の詩集・語録には、将軍との文雅の交流の記事が多く、そこでは漢詩漢文のみならず、和歌ないし和歌的教養が媒介を果たしていることも見逃せない。正徹もまた東福寺書記を務めた禅僧である。禅僧と和歌との関係は、室町文化を考えるひとつの鍵となろう。

さらに、全生涯が義政と重なる、息義尚についても取り組んで欲しかった。義尚は先行研究でもある程度注目されていたが、それはもっぱら歌壇の庇護者としての面であった。義政と同様に、あるいはそれ以上に、膨大な和歌事績を残している。そして近年の政治史研究では、義尚は、協調・対立を繰り返しつつ、義政の主導権を奪おうとしていたことが明らかになっている。その点を和歌事績から究明すれば、義政論の陰翳もより

深まったと思われる。また義尚には作品も多く残されているので、できれば歌風などについても踏み込んだ分析が欲しかった。

なお、附録「足利義政全歌集」についても、使用した歌書の底本は明示されているが、その選定・校訂の基準や書誌的情報、あるいは他の伝本に関する説明が十分になされているわけではない。諸書を博捜した労作であるが、それだけに、より細部に及ぶ配慮が欲しいところである。未紹介・未翻刻の資料も利用されているため、解題自体が貴重な研究成果となるはずである。

とはいえ、これらはいずれも今後長い時間を要して、初めて解決できる課題であるとも言える。個々の論文の完成度は極めて高い上に、かずかずの新見に満ちており、得られた成果は総体として誠に大きく、揺るぎないものがある。

以上の点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分ふさわしいと判断するものである。